KANSAI UNIVERSITY

CTL
Kansai University Center for Teaching and Learning
Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニューズレター

March 2017
vol.23

ゼミナールの効用

教育推進部長 良永 康平

文系であれ理系であれ、少人数教育、特にゼミナールが、様々な意味において重要であることは間違いない。本学「教育後援会」の機関誌『葦』を見れば、ゼミナールの意義について各学部の先生方がほとんど毎号のように言及している。単なる知識の伝授ではなく、学生自らが問題を発見、提起でき、教師のアドバイスを得つつ先行論文を検討したり、フィールドワークや実験したりしながら、その解決策や糸口を求めて主体的な関わりができる。これぞまさにアクティブラーニングである。他にもそのような講義、講座、研修等が開講されてはいるが、ほとんどの文系学生は少なくともゼミナールには積極的に参加することによって、従来自己形成をしてきたと言っても過言ではないだろう。

そしてさらに合宿や旅行、懇親会、他大学との合同ゼミナール等を通した人と人との関わりのなかで、人間的な成長やコミュニケーション力を育んで、社会に旅立っていった。だからこそゼミナールは大学時代の貴重な想い出の一つであり、掛け替えのない生涯の友との出会いの場であり続けている。このようなゼミの重要性は、現在進行中の教学ＩＲプロジェクトによる「卒業時調査」によってさらに鮮明に、そして様々な角度からも明らかにされてゆくことだろう。

とはいえ、ゼミナールを主催する側からすると、様々な動機や背景を持つ学生を、一丸となって主体的に取り組むように誘導するのはなかなか難しい。書物や論文を輪読しているだけでは、知的好奇心や探究心も生まれにくい。どうやって学生を覚醒させ、主体的に関わることを体得させるか、教師の腕の見せどころである。

教員はそれぞれに工夫して、ノウハウを持っていると思われるが、小生の場合は学内外で開催されるプレゼンやディベートの大会を1つの目標に設定し、他のゼミとの競い合いのなかから、学生の心に知的好奇心を呼び起こす工夫をしている。幸い、経済学部と商学部には「経商ゼミナール大会」という伝統の行事があり、研究報告やディベート、プレゼン大会等が師走に開催されている。また「日本学生経済ゼミナール」という全国組織が、全国大会や関西ブロック大会を開催している。こうした大会に出場し、他大学の士気の高い研究報告や熱意ある学生との交流を通して、ゼミ生達のモチベーションが育ってゆく。まさに「井の中の蛙よ、大海を知れ！」である。

フォーラム・セミナー報告

シンポジウム「大学におけるライティング支援体制づくりを考える—学生の書く力をつけるために—」を開催

日時：2017年2月18日(土)13:00～17:30
場所：第1学舎1号館千里ホールA

2017年2月18日に、大学間共同教育推進事業「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」による、津田塾大学との合同シンポジウム「大学におけるライティング支援体制づくりを考える—学生の書く力をつけるために—」が、関西大学千里山キャンパス千里ホールにて開催された。本シンポジウムは、取組最終年度における総括として、これまでの5年間の取組の成果を公表するとともに、取組期間終了後のライティング支援の展開のありかたを模索するものとなった。

第1部では、本取組の外部評価委員である早稲田大学の佐渡島紗織氏による基調講演「大学における《支援》と学生の《自立》」の後、本取組にかかわってきた関西大学および津田塾大学の特任・特命教員4名による取組成果の紹介がおこなわれた。取組成果紹介においては、関西大学ライティングラボと、津田塾大学ライティングセンターそれぞれのライティング支援の理念と特徴が紹介されたあと、本取組における大きな柱である、ルーブリックを活用したライティング支援の実際をめぐる報告と、WebによるライティングTEC-systemの開発と活用をめぐる報告がなされた。

第2部のパネルディスカッションでは、本取組の評価委員である佐渡島氏、ならびにトム・ガリー氏（東京大学大学院教授、The Writing Centers Association of Japan代表）を招き、本取組にかかわってきた教員の代表との間で、本取組の意義と、これからの日本におけるライティング支援体制づくりをめぐって、活発な意見交換がおこなわれた。

なお、本シンポジウムは、津田塾大学会場にも中継され、両校あわせて54大学から157名の教職員・学生が参加し、盛況であった。　（文学部　中澤　務）

パネルディスカッションの様子

教職員合同FD/SD研修会「大学におけるライティング支援体制づくりを考える」を開催

日時：2017年2月19日(日)9:00～12:00
場所：第1学舎1号館実験実習・語学系教室(2)

2017年2月19日に、大学間共同教育推進事業「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」による津田塾大学との教職員合同FD/SD研修会として、ワークショップ「大学におけるライティング支援体制づくりを考える」が、関西大学千里山キャンパスにて開催された。

事業の最終年度となる今年度は、前日に開催されたシンポジウムのテーマを受けて、大学において学生のライティング力を組織的に支援していく際の体制構築について検討する内容となった。大学でのライティング支援体制の構築に関心を持つ学外からの参加者も含めた大規模なワークショップ形式で実施され、参加者は67名（うち津田塾大学・関西大学関係者は30名）と盛況であった。

まず、ライティング支援体制づくりの実践例として、三つの大学の担当者（龍谷大学・長谷川岳史氏、関西大学・西浦真喜子、津田塾大学・飯野朋美）から、ライティングセンター設立の経緯やその運営体制などを報告してもらい、情報と問題の共有をおこなった。その後、数名のグループに分かれて、グループディスカッションが実施された。ディスカッションでは、実践報告をふまえて、支援体制を組織的におこなっていくうえでの課題について自由に意見を出し合い、活発な議論がおこなわれた。

（文学部　中澤　務）

長谷川岳史先生による事例報告

関西大学・大阪府立大学AP合同フォーラム「学士課程教育における内部質保証システムの構築にむけて —3つのポリシーと学修成果の可視化の連動性に着目して —」を開催しました

日時：2017年2月9日(木)14：00～17：30
場所：梅田キャンパス８Ｆホール

2017年2月9日に関西大学梅田キャンパス８Ｆホールで、大阪大学をゲストとして招き、大阪府立大学と関西大学でAP合同フォーラムを開催しました。2016年3月末に文部科学省中央教育審議会大学分科会の大学教育部会より「3つのポリシーの策定及び運用に関するガイドライン」が発表され、内部質保証システムの構築が求められていることから、学内外からも高い関心が寄せられました。当日は、北海道から九州まで、179名が参集し、熱い議論が展開されました。

フォーラムでは、関西大学の芝井敬司学長から、急務である内部質保証システムの構築について挨拶があったのち、専門家である川嶋太津夫先生（大阪大学）より、その必要性や考え方について基調講演をいただきました。さらに関西大学、大阪府立大学、大阪大学という大阪を代表する3大学による、内部質保証システムにおける学習成果の可視化の取り組みについて事例報告を行いました。パネルディスカッションでは、フロアからの質問カードを中心に、みなが苦労している課題について共有を行いました。最後に大阪府立大学の前川寛和副学長から挨拶をいただき、大阪から発信する内部質保証システムの構築に向けて、次年度も引き続き、情報交換を行うことを確認しました。

（教育推進部　森　朋子）

AP合同フォーラムの様子

第23回ランチョンセミナーを開催しました

日時：2016年12月9日(金)12：20～12：50
場所：第2学舎2号館2階C207教室

前回の「知って得するルーブリック活用術～ルーブリック評価を体験しよう～」に続き、今回は「外国語の読解能力を評価する方法」と題して、英語の授業におけるルーブリック活用の事例を報告しました。

当日は、まず筆者が担当する英語リーディングの授業の概要を説明したあと、具体的な授業内容を報告しました。その中で、毎回の授業において英文を日本語で要約する課題を出し、その成果物を学生同士がルーブリックを使用して確認し合うという方法を紹介しました。それから、ルーブリックを評定の基準とするツールとしてではなく、学習目標を達成するプロセスの中で、各自で毎回のトレーニングを振り返るためのツールとして使用することで、英文読解を繰り返し行うことを学習者に促し、その結果、個々の文の意味だけでなく文脈全体の理解度の上昇が確認できたことを報告しました。

参加者からは、「学習の修得度upのためにくり返しルーブリックを使用することで、ルーブリックの活用範囲が広がったように思う」、「ルーブリックを用いた具体的な授業運営についてお話が聞けました」、「ルーブリックを日常的に使っている取り組みを知ることができた」などの声が寄せられました。評価ツールとして注目されるルーブリックについて、その導入を促進する試みはこれまでにも行われてきましたが、それを具体的にどのように運用しているかについては、今後も報告が待たれるのが現状です。ルーブリックにご関心を持たれた方はお気軽にお問い合わせください。

（教育推進部　佐々木知彦）

Learning Assistant
LA活動報告

科目提案学生委員(兼LA)がFil2017で発表しました

2017年2月24日、東京都市大学・二子玉川夢キャンパスを会場に「Fil2017」が開催されました。「Fil」は「field of invaluable learning」の略称で、全国の大学で新しい何かに挑戦している学生たちの活動の報告を受け、これを応援することを目的とした企画です。関西大学は第一位を獲得した昨年に引き続き、二度目の出場です。出場した学生は『恋する学問』という授業科目を創設した科目提案学生委員三名(松田昇子:政策創造学部4年、緒方友香:文学部4年、篠原梨沙:商学部4年)と、この科目を昨年度受講し、今年度は上記三名の補佐役にボランティアとして名乗りをあげた二名(河井七星:商学部2年、山岡滉太郎:社会学部3年)です。Fil2017には、関西大学の他に追手門学院大学、日本工業大学、常磐大学の三校より四チームが出場しました。いずれのチームも、日頃の活動を丁寧に説明し、難局をどのように克服したか、重ねた省察をもとに報告をしました。残念ながら、関西大学のチームは連覇を達成することあたわず、2位にあまんじましたが、得るものはあったように思います。来年の参加がリクエストされましたので、これより新たな取り組みを学生と共に考えていきたいと思います。

(教育推進部　三浦真琴)

LAが桃山学院大学のFD学習会に招聘されました

2017年2月16日、桃山学院大学で開催された「全学FD学習会」に、本学のLA2名(松田昇子:政策創造学部4年、緒方友香:文学部4年、篠原梨沙:商学部4年)と次期LA2名(河井七星:商学部2年、山岡滉太郎:社会学部3年)が招かれました。今回の学習会のテーマは、関西大学の学生アシスタント制度と学生提案科目『恋する学問』で、当初、第一部はCTLの三浦がLAと科目提案学生委員について概要を説明する講演、第二部はLAがグループワークをファシリテートしながら桃山学院大学の新しい授業科目を考えるワークショップ、という構成になっていました。しかし、第二部のグループワークをスムーズに展開するために、第一部においてグループワークの予行演習をしておこうというLAの提案にしたがい、第一部の途中で話者を三浦からLAへとバトンタッチしました。このたび随行したLAは科目提案学生委員でもあり、次期からLAとして勤務する二名の学生は学生提案科目『恋する学問』の昨年度の受講生であり、今年度、ボランティアとして授業の創造と運営の支援をしています。その経験を活かして、桃山学院大学の参加者の皆さんを楽しいグループワークへと誘い、その結果、実に魅力的な科目がいくつも提案されました。当日の参加者は、学長・副学長をはじめ、教職員、学生併せて34名でした。学長からは「他の学生とは異なる立場にあるのに偉ぶるところが微塵もなく、参加者の笑顔を上手に引き出していました」とのお褒めの言葉を頂きました。学習会に参加した学生は「エルダー」と呼ばれる学生スタッフですので、今後、本学のLAとの交流が深まることに期待が寄せられています。既に他の大学のLAとの交流が始まっていますが、その和をさらに広げていく必要を感じた学習会でした。

(教育推進部　三浦真琴)

第8回交渉学ワークショップ開催

日時：2016年12月17日(土)13：00～17：30
場所：第2学舎1号館B301、B302、B305、B306教室

交渉学に興味のある大学生、アクティブ・ラーニングを促進する交渉学に興味のある学生、大学関係者ならびに一般社会人を対象に、交渉学ワークショップを行いました。参加者は追手門学院大学の学生を含めて、27名、大学教員6名でした。

「スタディスキルゼミ(各テーマ)」や「交渉学入門」「クリティカルシンキング」などの授業でラーニングアシスタントとして活躍する学生や受講生がチームを組み、交渉学や大学生のアクティブ・ラーニングによる学びの実化をテーマに、学生が主体となったワークショップを行いました。60分のミニセッションを10テーマ準備し、信頼を構築・維持するためのコミュニケーション力を身につけるワークショップを行いました。今回も毎日新聞社より後援をいただきました。

(教育推進部　山本敏幸)

第9回交渉学ワークショップ開催

日時：2017年1月15日(日)10：00～17：00
場所：梅田キャンパス705、704、703、702教室

1月15日、極寒の雪の降る中、本学梅田センターで、交渉学のワークショップをおこないました。今回は交渉学をリードするブレインの育成(基礎編)と題して、一般社会人(14名)、大学生(7名)、高校生(1名)が合わせて22名参加しました。

構成は午前の部と午後の部からなります。午前の部は、これまでに交渉学研修に数回参加され、交渉学のケース作成や交渉学ファシリテーターを目指す交渉学リーダー(社会人、学生)を対象に、交渉学のためのビジュアル・オーガナイザーを使ったケースデザインの研修とディスカッションを行いました。

午後の部は、交渉学について興味を持つ社会人、学生を対象に、交渉学のケース作成・ファシリテーターを目指す交渉学リーダー(本学のラーニングアシスタント)が作成した日常生活の身近な交渉学コンテンツを使って、二者間及び三者間のwin-win交渉学の基本概念をロール・プレイも体験しながら学びました。

(教育推進部　山本敏幸)

三者間の交渉ロールプレイの様子

From CTL事務局

本学に入職以来、6年間、授業支援グループの業務に携わらせていただいております。

本学に勤めてまず驚いたのが、各授業支援ステーションにSA(スチューデントアシスタント)が数十名在籍し、職員と同じように窓口対応をしたり、教室に機器の設置に行ったりと活躍していることでした。そして、勤務場所に常に学生であるSAがいることに、初めは戸惑いを感じました。彼らとどのような距離感でどういう風に接していけば良いのかと悩んだ記憶もあります。

しかし、SAは入職して間もない何もわからない私に、窓口業務や機器設置の方法などを丁寧に説明してくれました。職員である私が学生であるSAに助けられ、教えられることが多々あり、6年経った今も日々SAに支えられています。

SAは、自身の通っている大学で働けることにやりがいを感じ、教員がよりよく授業を進められるにはどうすれば良いか、窓口に質問・相談をしに来る学生が少しでも不安をなくすにはどうすれば良いか、日々悩み、考え、話し合い、サービスの向上に勤しんでいます。

「職員」と「学生」なので、立場も責任も違いますが、彼らは同じ場所で同じ気持ちで一緒に働いている「仲間」だと思っています。

「考動」するSAが本学で活躍していることを誇らしく感じるとともに、より多くの方々に本学SAの活躍を知っていただけることを願っています。

そして、卒業し社会に羽ばたいていく彼らを「仲間」としてずっと応援しています！頑張れ!　(陽)

KANSAI UNIVERSITY
関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35　TEL: 06-6368-1513　FAX: 06-6368-1514
http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html
発行日／2017年3月31日　編集・発行／関西大学 教育開発支援センター